

## 保井コノの生涯

### 家庭環境

保井コノは明治13年(1880)、香川県大川郡大内町三本松で保井忠七とムメの9人の子供たちの総領娘として生まれた。コノという名の由来は父方の祖母の名がコノといい、とても利発な人だったのでこの名が選ばれたという。女の子にやさしいとか美しいとかでなく、利発さを求めた両親の姿勢がみられる。保井家は廻船問屋で、北前船も運航し、さらに質屋を営み広く田畑も持っていたといわれる。(現在も三本松にこの屋敷は残っている。)三本松は江戸時代に高松藩が砂糖会所を設け、その積みだし港として栄え、瀬戸内海の有数の港であった。また、村には明治社という教育団体があり、教育にも熱心な風土で、コノより以前にも東京女高師(=東京女子高等師範学校、現お茶の水女子大学、以下東京女高師と略称)の卒業生が出ていた。こういう土地柄を背景に、中央で勉学をして有名になった人も多く、東京大学総長南原繁、気象学会会長鈴木清太郎、東京理科大学学長真島正市、初代日本弁護士会会長有馬忠三郎氏らがいる。コノの両親は、ともに学問好きで、母は読書を好み、養子であった父も幼いコノに福沢諭吉の『学問のすすめ』を読むように勧める人であった。母は時代を見る目のあった人らしく、明治半ばになり、輸送の仕組が変わって、昔のように廻船問屋がうまくゆかなくなると、田畑を整理して大阪に移り住み、借家業や紡績会社の女子工員の宿舎を賄いつきで営んだ。さらに関東大震災後は東京に移り、借家業や下宿屋を営んだという。コノが上級の勉強がしたいと言った時、ムメは「私が何とでもしてあげるからやりなさい」と励ましたという。またコノの20歳年下の妹マサも関東大震災の少し前から姉の住んでいた本郷東片町の家に住み、ここから専門学校に通い、荒木十畝について日本画を学んだ。これらは皆母の理解により進められたものであろう。マサは絵葉書や扇子に草花の絵を描き、外国へ出かける人やコノの友人の外国人にプレゼントした。コノが渡米したときにも持って行った。国立遺伝学研究所長木原均や日本遺伝学会会長木村資生らが外遊したときにも手渡されている。私も留学の時に頂き、有難く利用させていただいた。

### 進学と母

コノは大層利発な娘で、漢文を学び十八史略や日本外史を読んだ。三本松尋常小学校、白鳥高等小学校を抜群の成績で卒業、さらに高松の県立師範学校に入学した。ここでコノは理科に興味を抱くようになり、その専門的な勉強をするために英語も独学した。さらに一層の研学を志したコノは、ちょうどその卒業時(明治31年、1898)、女子高等師範学校(明治42年奈良女子高等師範学校設立後、東京女子高等師範学校と称す)に新設された日本で唯一の理科に進学する(理科一回生)。この時代、幾ら裕福であっても娘を遙か遠くの東京に遊学させる親は少なかったであろうが、一方では、後に、津田塾大学を創始した津田梅子の親が娘をはるばるアメリカに遊学させたように、新進の気性に富むものも少なくなかったのである。あるいは余程コノが伶俐であり、両親の愛情が深かったためであろうか。コノは「東京へ出るための一番の賛成者は母で、『やりたいことはどんな苦勞をしてもやらしてあげる』と言った」と言う。女高師を卒業した時、「やりたいことがあるので、これから先10年間はなにも言わないでほしい」と頼んだらやらせてくれた。コノは「叔父が学究的な人だったし、近親に自分の学問のために江戸に出ている人があったので、遠くへ出すことには抵抗はな

かったのであろう」と言っているし、また「大阪に親類もいたし、東京はさほど遠いとは思わなかった」とも語っている。東京でコノが亡くなるまで一緒に生活をした妹マサは、当時を振り返って「あの頃姉さんが人力車に乗って東京から帰ってくるのを、今か今かと待ったものでしたよ」と懐かしんでいる。三本松まで船で来て、それから人力車に乗ったのであろう。しかしコノは、親の移住ということもあって、故郷へはその後あまり立ち寄りなかったようである。

東京女高師の学費は国費だった為卒業生は全員教員にならなければならなかった（教員にならなかった卒業生には学費を返済させた）。22歳のコノは岐阜市立岐阜高等女学校の理科の教員として赴任した。この時女高師時代の恩師飯盛艇造から高等女学校向けの物理学の教科書を書くように勧められ、コノは喜んで執筆した。しかし、この教科書には文部省の検定が下りなかった。女子に物理学の教科書など書ける筈がないという偏見によるものであった。これが余程悔しかったのか、これ以後コノは生涯にわたり、研究に関するもの以外には執筆しなかった。

## 学問への道

三年間の教師生活を終えると、保井コノはかねてから興味を持っていた実験心理学研究の準備のために生物学を学ぼうと考えた。これは、女高師在学時代に松本亦太郎氏(1865-1943)がヴント(Wilhelm Max Wundt)の実験心理学の講義と実験をしたので、保井はこの学問にすっかり夢中になってしまったのである。明治38年(1905)母校の東京女高師に研究科の「官費研究生」制度が設置されると、その理科の定員1名に選ばれ、岩川友太郎教授の指導をうけた。岩川は、明治初年、欧米の文化を早急に取り入れるため政府が招いたお雇い外国人教師モース(Edward Sylvester Morse: 大森貝塚や古墳の発掘などで知られる)に私淑して、飯島魁氏とともに東大理学部生物学科の一回生となって教えを受けた人物である。岩川らは最初2年間はモースの指導を受けていたが、モースが帰国したので、次にやってきたドイツ人ホイットマン(C.O. Whitmann)に、各人にテーマを与えるというドイツ流の指導を受けた。この時、岩川はイモリの卵の発生を、飯島はイシビルを研究した。1882年に、ホイットマンは彼らの仕上げた論文を“Quarterly Journal of Microscopical Science”に掲載した。教官指導とはいえ、岩川はこの時、科学論文の書き方を習得した。後年保井が岩川についていた時、割合に早く論文を纏めることができたのは、岩川にそのような指導能力があったからだろう。岩川はモースを親のように慕い、モースのあと、日本に於ける貝類研究の嚆矢となり、権威者となった。保井は米国留学中、モースをセーラムの自宅に訪ねた際、岩川の弟子だということで、自宅に泊めて貰って歓待を受けた。保井は1906年には最初の論文「鯉のウエーベル氏器官について」を『動物学雑誌』に発表した(動物学雑誌には巻頭に女の論文が載っているよと一部の研究者は笑ったという)。これはわが国女性科学者初の科学論文であり、保井の意気込みのほどが窺われる。岩川は保井に当時台頭してきた発生学の研究をヒルを用いて行うように勧めたが、動物を扱うのが嫌で、同じ発生学を植物のサンショウモ(山椒藻)を用いて試み、明治42年(1909)植物学雑誌に予報した。これが東京帝国大学農学部教授三宅驥一氏の目に止まり、以後指導を受ける。1911年「さんせうもノ生活史」という題



でイギリスの植物学雑誌 *Annals of Botany* に発表。日本女性が外国雑誌に発表した最初の科学論文である。この国際的雑誌への論文掲載は、のちに米国に留学した時、日本で大学を卒業していない彼女が、大学院生という身分で研究できる条件を得るのに大きな助けとなった。この頃保井の研究したサンショウモ (1911)、アカウキクサ (1913)、ミズワラビ (1918) などの水生羊歯植物の生活史はまだはっきり判っていない分野で、保井により始めて明らかにされたものである。これらの生活史や形態学の論文は小倉謙著『植物形態学』(1934) に多数引用されている。丁度裸子植物の形態や生活史がようやく問題とされてきた時期だった。当時の発生学では、ヘッケルの「個体発生は系統発生を繰り返す」と言う考えが主流を占め、保井も当然この立場を取ったと思われる。

保井が科学の勉強を始めたこの時代は、日本の女性にとっても画期的な時代であった。明治時代になり近代化の進んできた日本で、女子の教育制度がだんだんに整い、それに従い景山英子の『人間平等論』や岸田俊子の『函入娘』などに端を発して、女権論が徐々に活発になり、ついに明治44年(1911)『青鞥』が創刊された。それは奇しくも、日本女性として保井がはじめて外国雑誌に論文を発表した年であった。この時、保井は31歳、理科のみならず文科や家政科にも友人を持っていた保井が、『青鞥』創刊に関心を寄せたであろうことは十分推測される。

## 留学と石炭の研究

三宅教授は保井の留学先として、自分が留学の時に師事したドイツのストラスブルガー教授 (E.Strasburger, 1844-1912) を推薦した。ストラスブルガーは細胞形成と細胞分裂の権威で、核分裂の様子を最初に明確にした一級の学者である。彼は保井を研究室に招くため机まで用意してくれ、女高師側もそれを後押ししたが、政府からは留学の許可が下りなかった。文部省側に科学の分野で女子を留学させても大成しないのではないかという考えがあったからである。1912年、分類学の大家エングラー (H.G.A. Engler, 1844-1930) が来日し、植物園で会食のあった席上、東京帝国大学理学部の藤井健次郎教授が、日本におけるたった一人の女植物学者だと紹介してくれた。後でそのお礼に行った時、保井の留学が頓挫したまななのを知った藤井健次郎の後押しにより、その1週間後に留学の許可が下り、1914年に留学が実現することになった。しかしながら、これには結婚しないで生涯研究を続けるという暗黙の制約があり、さらに、留学に際しては、「理科研究」に加えて「家事研究」という目的が付け加えられていた。しかしこの時には、ストラスブルガー教授はすでに他界し、しかも第一次世界大戦が勃発、渡欧は断念せざるを得ない状況であった。そのためアメリカのシカゴ大学のチェムバーレン (C.J.Chamberlain)、コールター (J.M.Coulter) 両博士のもとに行き、細胞学の研究を開始することとなり、ここで「柿の細胞学的研究」をまとめて発表した (1915)。もし保井がすんなりとストラスブルガーの処へ留学していたら彼女のその後はどうなっていただろう。ひょっとしたら彼のところでもっと早く学位論文を仕上げているかもしれないし、石炭の研究もなかったかもしれない。このあと、三宅驥一教授から、ハーバード大学のジェフレイ (E.C.Jeffrey) 教授のところで、その創始による植物組織研究の新法を学ぶようにと要請を受け、ジェフレイ教授のもとに移る。この新法は、それまで行われていた鉱物を砥石で擦って標本を作るやり方ではなく、石炭を薬品に漬けて柔らかくしてからセロイジンに包埋し、スライディング・マイクロームで切片を作るという方法であった。保井はこの方法を教えて貰ってとても喜んだようである。ジェフレイは世界の石炭の中で日本と満州 (中国東北部) は残しておくから、帰国してからも研究を続けるようにと勧めた。これが保井のライフワークの一つとなり、また学位論文ともなるのである。保井はこの時、日本から石炭を取り

寄せ早速研究に取り掛かり、その結果を *Annals of Botany* (1917) に送ってから帰国している。この頃ハーバード大学は共学ではなかったが、グラヂエートクラスだけは女子を受け入れたので、女子のみのラドクリフ・カレッジに在籍した。後年保井はこのカレッジでの生活を懐かしそうに著者に話したことがある。具体的なことは忘れてしまったが、昭和27年2月に掲載された新聞記事によると「これでも若い時はスポーツは大抵のものはやりました。ピンポン、テニス、クリケット、それから学校中ではカドリールもよく踊りました」と言っておられる。これは留学中のことであろう。また、留学中の思い出は『科学知識』(1935)にも書いておられる。男性研究者に混じって気を張り詰めて研究する以外に、女性同士の気の置けないおしゃべりや遊びがどれだけ異郷の学究生活を潤したのであろうか。1930年、後の北海道大学の細胞学の教授松浦一も同じくジェフレー教授に師事し、偶然保井の使っていた同じ研究室を使用した。彼はジェフレー教授は職人氣質の厳しい人であったと述懐している。保井もこの厳しい先生にくらいついて研究に励んだのであろう。

1916年帰国した保井は東京大学の藤井健次郎の指導を受けることになる。勤務先である東京女高師には保井の研究に必要な機械や材料を購入する研究費がつかなかったため、当時の校長中川謙次郎と東京帝国大学総長山川健次郎(長い間東京女高師の舎監をしていた山川二葉の弟)の尽力により、大正6年に東京帝国大学植物教室嘱託の地位を与えられ、当時新設された遺伝学講座の実験の手伝いをしながら石炭の研究を続けた。保井は早速ジェフレー教授の言葉に従い、愛知、岐阜地区の石炭を調べ、構成する植物化石がセコイアに酷似していることを発見。更に、セコイアが松に似た先祖に由来するという従来からの仮説を確認している。そして、日本各地の石炭を採集するため、東奔西走。彼女の採集地は、夕張炭鉱、三池炭鉱、福岡県大辻炭鉱、さらには満州撫順炭鉱などの広範囲に及ぶ。採集の時、同行の大賀一郎が怖いといって降りなかったのに、保井は自ら「もっこ」に乗って地下の坑道まで降りて行き、坑夫に直接あれが欲しいこれが欲しいと頼んだ。坑夫もこんな所にまで女性が降りて来たと言ったと驚き、とても親切にしてくれたという。

保井がこれまで研究してきた水生羊歯を用いた仕事は、植物化石である石炭の研究に大いに役にたつたと考えられる。石炭を構成している古生物の木生羊歯や古い松柏科のうち、羊歯植物は今まで手がけてきた水生羊歯の仲間であるし、イヌカラマツ (*Pseudolarix*, 1911) も研究したことがあるので、これらのあまり進化していない植物と、石炭を構成している古代植物の形態や組織のどこが異なるのかなど興味津々で比較形態学的に研究を進めたのではないだろうか？保井は石炭の材料である植物の茎の縦、横、放射線状の切片を作成して顕鏡し、導管、仮導管、木部などの構造や並び方を観察して石炭を作った植物の種の同定を行った。石炭の中から発見された植物には、*Bryotrichum*、*Aichense*.Yasui とか *Sequoia.hondoensis*.Yasui というように種名に保井の名がつけられている。この時、保井



保井のプレパラートと植村和彦氏 国立科学博物館内

の作った2000枚に及ぶプレパラートは、英国から購入したCoal Ball(石炭中に含まれた化石の切片。販売されていたので、保井はこれを研究の参考に用いていた)と共に、東京にある国立科学博物館に寄贈され、それは今、同分館(大久保)の植物化石研究室に保管されている。日本の炭坑は閉鎖されて久しく、保井の蒐集したような化石を現在求めることは難しいので、保井のプレパラートは日本産植物化石研究には欠かせな

い貴重な資料となっている。Coal Ball も商業的に販売されたものとはいえ、これも地球の貴重な財産であろう。なお、この研究所の植村和彦氏は国立科学博物館に着任された年に、小石川植物園内の植物学研究室にこれらのプレパラートを取りに行かれたそうで、思い出深い品となっているようだ。保井は、また石炭を形成している木材(茎)部だけでなく、そこに一緒に埋まっていた化石花粉などを観察し、広く古代植物を勉強しており、これがその後の彼女の視野を広くしている。

保井が石炭の切片を作るために用いたスライディング・マイクロームは京都大学理学部植物学科細胞学研究室にもあった。この研究室の創始者桑田義備博士は藤井健次郎氏の弟弟子で、保井とも親しかった。そのせいかこの便利な器具を輸入し、自分の研究にも用いたようである。著者も大学院生の頃、これを使って研究を進めたことがある。

## 日本で最初の女性博士

1923(大正12)年に関東大震災があり、東京女高師の校舎は焼失した。女高師での教員としての生活や研究生活は多忙で、困難が多かったものと察せられる。しかし、その中で保井は、石炭の研究を「日本産石炭の植物学的研究」としてまとめた(1928)。これに日本第3紀のセコイアの化石材(1917)、第3紀のコケの内部構造(1926)、細胞膜の石炭化過程における変化(1925)やチャ属植物の気孔に関する研究(1926)、アサガオやマツバボタンの遺伝に関する研究など、8篇をそえて、保井は東京帝国大学理学部に学位請求をした。3月25日の教授会で全員一致で合格し、4月20日学位記が授与された(1927)。このとき保井は47歳、日本における女性博士第一号となった。

保井の日本産石炭(亜炭、褐炭、瀝青炭)の研究によると、細胞壁の部分はクチン化、スベリン化、リグニン化、キチン化したもの、柔組織細胞壁などで、クチン化したものとキチン化したものとは最も抵抗力が強く、長



く保存され、柔組織細胞壁はしばしば破壊され消失する。炭化の種々の段階にあるリグニン化した壁はさまざまな程度の二重反射を示すが、炭化が進むにつれてその性質が失われる。この変化とともに細胞壁よりセルロースがしだいに減少する。したがって炭化の初期における重要な過程の一つは、細胞壁よりセルロースが減ることである。保井の見解によると、石炭は水成堆積物と転行物質からできている。そこで、彼女はこれまでにあった微生物による石炭成因説を否定している。この石炭の研究はそれまで日本になかったもので、独創的な成果である。保井が学位をもらった時、女性博士一号というので、報道機関が騒いだり、関係者達がお祝いの会を催したりした。この時保井は私の周りの学問に携わる人々にとって学位取得は大した事ではないので大げさに騒がれては困るといった。この祝賀会で保井の最初の師岩川氏は、保井の研究態度を「困難な問題に対してはそのまま側におい

ておき、更に他方面にとりかかるという巧みさがある」と言った。保井は女子が理科の研究に不適當でないことを証拠だてたのである。保井はまた、母校が我が国唯一の女子の理科教育の機関であることから、その完成と向上、および母校教授に女性の少ないことを嘆き、昇格運動をしたいと思っていた(国立女子大学の設立)。

東京女高師の卒業生は女学校や女子師範学校の先生にはなれたが、東京女高師のような専門学校の先生の資格はなかった。保井に続いて、黒田チカが理学博士の学位を取得した時、保井は「学位を取ったからと大騒ぎして祝賀会をしなければならない現状を情けないような気がする、外国では女性が学位を得たとてあたりまえのことで、人々は日常のことと思っている。私も一昨年学位を貰ったが為に窮屈で厄介だと思ふこともある。でも外国との関係上などからドクターでないと不便なこともあったりするので、とにかく論文を出したのである。しかし大きい意味ではたしかに喜ばしいことである。学位を有する者が少数だと厄介を感じたりするのであるから、若い人達は折角勉強してどしどし博士になって頂きたい」と述べた。



学位取得後保井は「私は幸いに何物にも煩わされず、自分の好きな道をコツコツ歩いて参りましただけでございまして、名も求めず、地位も求めず、ただ自分の仕事が残ってゆけば、それだけで、自分は充分満足してゆけると信じております」と述べている。これは、保井の一生の研究姿勢であった。

これよりさき、1917年12月に野村徳七、実三郎、元五郎氏ら兄弟より寄付された九州電鉄社債5万円と現金1万円を基金として、翌1918年7月13日に「細胞学を基礎とする遺伝学講座」東京帝国大学理学部植物学科遺伝学講座が創設された。初代の講座担当教授は藤井健次郎で、保井は1917年12月31日より1939年まで東大植物学教室の嘱託となって、約20年にわたり実験を担当した。しかし、女性が男子学生に講義をすることにはまだまだ抵抗があり、渋い顔をする人も多かったという。1929年、藤井を主幹として世界的に権威のある細胞学の雑誌『キトログア』が創刊された。女高師（女高師は大学でなく師範学校であったので授業の時間数が多かった）と東大での授業、さらに自分の研究に明け暮れる日々の中で、保井は藤井や篠遠喜人、和田文吾、田中信徳らを助けて病に倒れるまで、編集、印刷、庶務会計に携わり、さらに毎年のように自分も論文を掲載していた。この時の作業がどんなに大変であったかということは篠遠が書いている（『自然』1971年9月号、『採集と飼育』1971年9月号）。石炭研究のあと、保井はトウモロコシ（種子に変異が見られる）、アサガオ（花や葉の色や形に変異）、ムラサキツユクサ（花粉の減数分裂や根端細胞の分裂時の染色体を調べた）、ケン、ギボウシなどを材料にして、遺伝学、細胞学的研究を行っている。（日本植物学会、日本遺伝学会、日本染色体学会などの会員で、毎年研究発表をしている。）広島に原爆が投下された時は、すぐに被爆したムラサキツユクサを採集し、放射性物質が植物に与える影響について報告している。この頃の細胞学は染色体学会に代表される染色体の数、形態、細胞分裂の際のその行動の研究が多く、保井も上記の材料を用いてこれらの研究を行なった。保井の論文は優れたものが多い。彼女は世界で問題になっている最先端の話題を、新しい研究方法により、いち早く研究し、明快な解説をしている。東京大学という日本で最高の情報収集の中心に居り、『キトログア』の編集に携わっていて、世界の趨勢が見える立場であったことがそれを可能としたことは言うまでもないが、保井が素晴らしい集中力を持ち、勉強家であったことを物語る。1953年ワトソン・クリックによりDNAの構造が解明されて50年経った今、なんでもDNAにより解決されるように思われているが、この頃の保井らの地道な染色体の研究の上にDNAの理論が成り立ってい

ることを忘れてはならない。また、これらの研究の傍ら、保井は日本石炭学会にも所属し、学会・研究会に出席している。そこで自分の研究成果を確かめて、更なる考察に生かしていったものと思われる。保井の研究を東京大学の教授達が支えたが、これは単に保井が優秀だったからだけではなく、先生方の資質にも起因するようにも思われる。三宅驥一氏は、東京大学に入学する前に、米国帰りの新島襄の創立した同志社理科学校大学部を卒業しているが、ここで開明の思想を学んだと考えられる。そして、その後、米国のコーネル大学、ドイツのボン大学への留学中に多様な女性の生きる姿を見たので、女性の学問研究に偏見を持たなかったと想像される。また、藤井健次郎氏は、ドイツで英国人ストープス (Marie Stopes) 女史と出会い、帰国後日本へやってきたストープス女史と植物化石の研究をし、共著論文を出している。藤井はストープスと言う女性研究者と共同研究をした経験があるので、日本の女性研究者に偏見や抵抗を持たなかったのであろう。このように保井は、研究や指導能力に優れているばかりではなく、女性に対する偏見のない考え方を持った指導者に恵まれた。

## お茶の水女子大学設立

昭和 24 年 (1949) 新しい学制が敷かれることになり、保井は東京女子高等師範学校を女子の国立大学として存続させる為に、あちらこちらに陳情に出向き、猛運動を展開した。この際家政科在学の生徒たちは、陳情先に手土産として持参する絞りの風呂敷を作った。幸い大学が設立された時、彼女はつぎのように述べている。「この大学が出来たことについて一言申し上げたい。女高師は明治 8 年より師範教育をしてきたが、女子の仕事として学校の先生だけでよいのだろうか。全国的にひろがり新しく国立大学として立つ以上、広い意味で一般的指導者として働ける人を養成した方がよいのではなかろうか。私は卒業後研究生生活に入って自由に楽な気持ちで過ごしたが、だれにでもこの道がひらかれるとは考えていない。それで女性が遠慮なしに学べる場所を持つ大学を作り、将来は男性の入学も開かれることもありえたいと考え、この大学の組織を作るまで苦勞をした。現在の大学では小規模すぎるが、独立して立つことに希望を持って、だんだん大規模にしなければならないと思う。この建学の精神をしっかりと守って在職中の諸先生方、学生達の奮起を望みたい」と。

保井が病に倒れた時、植物学教室に著者が今井百里江子氏を助けて荷物を片付けに行った。現在、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターで所蔵している保井の遺品の多くはこの時に今井氏が保管して下さっていた資料と、同大学の元講師の団仁子氏 (ジーン、元都立大学教授団勝麿氏夫人) が保管して下さったものである。

また、保井はいろいろな研究会や講演会によく出席した。「よく出席されますね」といわれると、新しいことを学びたいからと答えている。民主主義科学者協会主催の講演会にも出かけて、若い人々を驚かせた。これには次のようなエピソードがある。物理学者である湯浅年子が東京文理科大学に入った頃、湯浅は大学をやめて地下運動をすべきではないかと真剣に思いつめて、保井を夜自宅に訪ねた。この時保井は「私も左翼思想には反対ではない。むしろ正しいものと思います。しかしあなたが今地下運動に入って世の中に貢献出来る事と自然科学に精進して出来る事とを比べたら私はあなたが自然科学に精進される方がよいと思う」と論じている。保井の大局に立った物事の捉え方の片鱗を示している。

著者も東京女高師で保井先生の教えを受けた一人である。保井先生の講義は、私たち学生にとって印象深く、興味をかきたてるものであった。ちょうど先生がデンプンの研究をしておられた時には、いろいろなでんぶんの形体を説明して下さった。ジャガイモのでんぶんは楕円形で、カタクリのでんぶんに似ているので片

栗粉の代用に用いられ、サツマイモのでんぷんは角張っていて、クズのでんぷんに似ているので、葛粉の代用に用いられるなどと、進行中の研究結果を楽しそうに講義で話された。後にこのテーマが論文になっているのを雑誌に確認して、著者はとても懐かしく思ったものである。戦後、植物学会などでよく保井先生とご一緒した。70代の先生は30代の著者より足が早く一緒に歩くのは大変だった。本郷の赤門前で電車を先生はちょこちょこと渡ってしまわれ、後に続こうとまごまごしていると、「電車道は半分ずつ渡るもので両方がすくまで待っていたらなかなか渡れないよ」と言われた。また、戦争中、十條の造兵廠に学徒動員で通っていた時、先生と駅から工場まで一緒に歩いたことがある。ちょうど空襲の翌日で、あちらこちらに死体がまだそのままになっていた。先生は、「見なくてもいいものは見ないでおきなさい」と言われ、私は一回も死体を見ることなく、有難かったと思う。先生は空襲警報が鳴るとすぐにゲートルを素足の上に巻かれ、スカートのままで女高師に駆けつけられたそう。当時の女高師の先生達はどうも自由思想の方が多かったようで、数学の所沢先生は大島紬に赤い帯を締めて講義をして私達を驚かせた。諸先輩達は「保井先生は怖かった」といわれるが、私はそう感じたことはなかった。おそらく、真摯に学問に向かわれる姿が厳しいととられたのであろう。本郷東片町の私宅には友人や後輩が訪ねて来て、チョコレートを食べたり、トランプをしたりと賑やかな団らんの時を過ごすこともあった。また、米国から帰朝された頃はとてもモダンな外套を着ておられる(YK-6011)。保井コノのことを学問以外に興味がないと非難する人もあったが、湯浅年子氏によれば世阿弥について造詣が深かったとのことである。辻村みちよ氏が大正2年女高師を卒業した時、お祝いに呂昇(娘義太夫)を保井から奢って貰ったという。どういう出し物だったのかわからないが、こんなものまで知っておられたとは意外である。出身地が香川県という人形浄瑠璃の盛んな土地でもあったし、父母が教養の高い人であったから、幼時から自然に日本の古典芸能に親しむ機会があったとも想像される。

また、保井は生涯独身を通したが、笹塚に住んでおられた弟の保井虎彦さんのお子さん達を可愛がられ、折に触れて、珍しい物を贈ったり、食事を共にして楽しんだ。

1955年、遺伝学者の木原均博士が保井コノを文化勲章候補に推薦したが、「女性の科学者は前例がない」といって選に漏れ、結局、紫綬褒章が贈られた(1955)。1965年には、勲三等宝冠章が授与された。

晩年の暮らしは年金だけで賄われ、古い制度のままでお金が支給されていたので、相当苦しい様子であったが、病床のコノの枕元にはいつも英字新聞や最新の外国の学術書が置かれ、読まれたところまで手垢で黒くなっており、死の間際まで学問に対する執念が見られた。あるとき、「女性蔑視の時代に生きてさぞご苦労されたでしょう」と尋ねると「みんなによくして貰ったのでそんなでもなかった」と答えられたが、人知れない悔しさはいかばかりであったことだろう。しかし、保井の懸命に精進する姿に周囲の人々が協力を惜しまなかったのも事実であろう。第二次世界大戦直後、藤井先生が「別刷はどうなりましたか」ときかれた。「大学に置いていたので全部助かりました」と答えたら、「それはよかった」との返事で、保井は衣類やその他の大切なものは全部弟のいる笹塚に疎開して、空襲で笹塚の家が全焼し荷物はなくなり、日常生活にとっても苦労をしていたのに、「その事については一言もきいてくださらなかった」と悲しんだことがあった。

女子の留学の珍しい時代に外国語を学び、単身海外に出かけて行った持ち前の進取の気性と明るさに加え、影になり、日向になり支えてくれた妹マサのやさしさや恩師たちの協力と理解に励まされて、彼女はあとに続く女性研究者のために黙々と先達の役割を果たしたのである。自分の好きな道をコツコツ歩いて、名も求めず、地位も願わず「ただ自分の仕事が残っていけばそれで満足です」と一途に勉学の道を歩んだ保井は女性だけでなく、すべての科学者の鑑である。

(三木寿子 記)